

予想を超える聴衆 数々の教訓を学ぶ

福島とこれから…3周年の視点から 大惨事、救援活動、復興を考える

シンポジウム

東日本大震災から3年——。イスラエルのハイファ大学で3月10日、『福島とこれから…3周年の視点から大惨事、救援活動、復興を考える』をテーマにしたシンポジウムが開かれた。主催者の一人、同大学のロテム・コーネル教授に集会の様子を聞いた。(聞き手・松村光子さん＝キアツ・ダリア)

シンポジウムの目的

ペンントリット
前駐日大使

——このシンポジウムの目的は？

コーネル教授 4つあります。1つは「東日本大震災」の死者、被害者の悲劇と苦しみを悼み、忘れないようにすること。2つ目は、復興の課程を追跡すること。3年後の被害者の状況、被害市町村の復興状況を具体的に知ること。3つ目。イスラエルが日本に派遣した支援団体とその活動が、イスラエル国内では詳しく伝えられていないのです。支援団体の種類、規模、質や救援に関わった人たちについてです。そして、これらの人たちの評価もね。これらもどこかで、超巨大自然災害や人災があるでしょう。その際、救援活動の目的を達するために、援助の改善や対策を考えておくべきだと思う。4つ目は、「東日本大震災」からイスラ

エルも学ぶべきだということ。イスラエルを、アフリカーシリア地震帯が縦断しているのです。1837年にはツファットで大地震があり、約2400人の死者が出ています。1927年にもジェリコ、エルサレム、ティベリアで大地震のため約500人の犠牲者が出ました。マグニチュード6.5くらいと推定されています。この地域では、1世紀に1回の強震があるようです。しかし、日本のように準備体制ができていません。

多くの方々が協力

——会議の準備は3カ月前から始めたということですが…。

教授 やはり、時間的限界がありましたね。でも、日本大使館の文化班やイスラエル外務省が快く協力してくれたのが私たちにあって嬉しかったです。佐藤日本大使が、いち早く参加をご承認くださったのも、大変嬉しいことでした。参加された講師の皆さんも、最初からこの企画をサポートして積極的に参加

してくれました。感謝しています。——会議主催のため、内外の団体から資金援助をお求めになりましたか。教授 あくまでも地元ハイファ大学が開催したイベントでしたから資金援助団体の援助は要請しませんでした。

参加者は1200人

——今回の会議は大成功でしたね。会場のラビン記念館は狭すぎたのではないですか。

教授 はい。講師を除いて、約1200人という予想以上の人々が参加してくださいましたから。

——1995年の阪神大震災と東日本大震災との違いは、何でしょうかね。

教授 まず、規模が違います。震度と範囲が違いました。阪神大震災の被害は、ほとんどが火災で、それも神戸の一部の地域だったと思います。津波もなかったし、原発の問題もなかった。今度の東日本大震災は、日本史上先例のない大惨事であったと思います。その範囲も700キロに渡っていました。原発事故も初めての経験でしたね。

ところで、阪神大震災の年には「今年度の漢字」に「震」が選ばれました。今回は「絆」が選ばれましたね。



コーネル
ハイファ大学教授



ペンントリット
日本派遣団医師



ペンントリット
前駐日大使